001　オレなんか　040119

　2019 年がスタート。「あけましておめでとうございます」とあらためていう人もなく、というか、本当にどなたとも会うことも、挨拶することもなかった。仕事が終わった年末の何日かから、予定が入っている年始の何日かまで、およそ十日間ぐらいの日々、絵を描いて、本を読んで・・。この四五日は娘がいるので、毎晩酒になる、毎晩飲んでいる、ビールにウイスキーにワインが減っていく。胃の具合も悪くなってきたかな、御馳走はいけないね、身体に。早く普段に戻りたい、ぼお～として、空を眺めて過ごしたいねえ。上西さんが鳥の話を聞かせてくれるので、鳥を見るようにしているが、小鳥は素早く走りすぎ、どれが誰やらわかりにくい。大きいやつは、カラスにハトにと何種類かはわかる、「やあ　元気か　飛んでるね」と挨拶だけで終わってしまう。

◎小田亮著＜他利学＞著書の帯に書かれている文、先生は動物行動学の学者らしい：「大災害を知り　あなたはどう行動しようと思っただろうか」自分の遺伝子を後世に残すことが最大の目的ならば、なぜ人は見ず知らず他人のために命を落とすことがあるのか。自分の損失になるのに、なぜ震災の被災者に物資や義援金を送るのか。生物学、心理学、経済学、哲学などの知見を総合して、こうして不可思議なヒトの特性を解明する。「情けは人の為ならず」が、実は人類の進化に大いに貢献しているのだ。

◎オレは、「人間は性悪である」「動物全般　性悪であるのと同様に」先日来こう思っている。若いころは人間の性は善だと思っていたが、今は、ヒトは動物たちと同じように、自利のために生き、性悪を貫いていると思っている。想像もつかないような時空を前にして、「オレなんて所詮ちっぽけなもの　心なんてありやなしや　日本なんて小さいことを言っている場合じゃございませんぞ」と思っている。時空の、まず時の話から。今、日本史の年表を調べると、ちょうど 1000 年前の 1016 年に藤原道長の摂政政治が始まると書かれている。1000 年というと昔も昔、大昔の話だけれど、年表を見る限り、たった 1000 年しか経っていない。日本の縄文時代が 1 万年間続いたらしいが、なにも資料がない、年表がないこのとてつもなく長い 1 万年が、一括りにして縄文時代として表されている。ホモサピエンスが表れて 10 万年、恐竜時代が何億年、地球誕生、太陽系誕生、宇宙誕生と、そらおそろしい時間が語られる。次に空間の話だ。最近興味を持っているのが、キノコやコケやシダ、そして粘菌。どうして見れば一番きれいに見えるのか、いずれどこかの先達に聞いてみたいと思っているが、裸眼ではなかなか見づらい。カメラのマクロレンズを通してみると、「やや　こんなところに虫が」「小さい花に　立派なツノが」と驚かされるが、もっといい方法があるはずだ。今は研究者がもっと小さい単位のもの、電子や陽子や分子が最小のものだと言われているが、それこそ将来は電子や陽子や分子の中にまだまだ世界がありそうな気がする。反対に大きい話になると、最近小惑星の“いとかわ”にロケットが到着して、そこの鉱物を持ち帰ってきたという。その小惑星がどこにあるのか、それこそ想像もつかないが、最近は宇宙の始まりの時間、宇宙の果ての場所までわかってきたとか。宇宙の大きさの単位、宇宙が生まれた時間、それらはとてつもない単位、オレなど吹っ飛びチリアクタ、人智を超えている。話は飛んでしまいましたが、そんなこんなで、オレの気持ちなんて、人の心の話なんて、「そんなもの　ありやなしや」とも思う。

◎人間の他利行動について、生物学、心理学、経済学、哲学といった様々な分野における研究成果を紹介していく。人間の行動について考えようとすると、そもそも人間がどういう特徴を持った生物であるのか、人間も生物である以上、他の主と同様に、進化の過程を経て現在に至っている。先生の話は本質に迫っていくが、内容はまた次回に。「自分の子孫を残すことが　生物の最大の目的」これは肝に銘じておきましょう。

◎イギリスの詩人、ジョン・キーツが紹介されている。キーツは、ニュートンが、虹を物理学的に解体し、光のスペクタルとして説明してしまったことによって、虹の持つ詩的なすべてを破壊した、と考えていた。しかしその虹の解体が、天体望遠鏡につながり、ついには宇宙の謎というさらに詩的なものをもたらしたではないか。

002　愛宕山　070119
◎今年、初めての山、愛宕山の林道入り口に来ている。阪急で嵐山駅まで（320 円）来て、バスで清滝まで（230 円）バスは満員で立って乗ってきた。ほとんどの方々は表参道を登るが、我々は、月輪寺からだ。
◎メンバーは、相澤・前川・堀井・岡村の 4 名。トイレをすませ石段に腰掛けみなさんはスパッツを着けている。
◎今は何時かなと腕をおさえ、時計がないことに気付き、そのことを話さなければ。まだ買って一年は経っていないと思うが、カシオのＧショックという時計を買った。この時計はアウトドアー仕様で若者が好んでつけている時計だと思っていた。ネットであれこれ検索をして、黒と金の入った格好のいいやつを注文した。時計が届いた時点でまずショックだったのは、「字がちいさい　見えづらい　これでは日付も　時間も　わからない」と天を仰いだ。二三ヶ月もすればだんだん慣れてきて、時間は読めるようになりつつあるが、読めない時もある。そんな時期に、野外でストレッチの最中に時計がポロリ腕から外れ土の上に落ちた。これが第二のショック。カシオに電話を入れると、一週間以上かかる、修理代は千円ぐらいだという。すぐに山の予定があったので市内の時計屋に持って行った。「はい　350 円」「安い　ラッキー」と簡単に直ったが、翌日またポロリと落ちたので同じ店に持って行った。「穴がホゲているので　自信はないが　少し長いピンを入れました」と直してくれた。半年ほど時間が経った年末にまた風呂場でポロリ。というわけでショックが続くＧショックくん、ただ今カシオに修繕入院中。アウトドアー仕様の腕時計が、こうも簡単に外れてしまうとは、おかしいのでは、構造ミスだと言っても、聞いてくれないね。
◎愛宕山はいつも月輪寺の方から登っている。山田さんの話では去年の台風で表参道が大被害、大木が倒れ歩ける状態ではなかったので、善男善女のみなさんノコギリ持参で何度も土方仕事の奉仕をされたとか。月輪寺は大丈夫かなと調べると、年末に雪の中を登っている写真が出ていた。大杉谷ルートは通行止めのロープが張ってあったが、帰り降りてきた人がいた、「通れましたか」「何とか通れたよ」という話だった。
◎林道を歩いていると、郵便配達の赤い“バタコ”が丁寧に頭を下げ追い抜いて行った。登山口の空也の滝にその赤いバタコが止まっていた。「まさか　月輪寺まで　配達なのか」登り 1 時間と書いてある、これを配達に登ったのか、往復 2 時間もかけて・・。郵便屋さんに会えば聞いてみようと思ったが、若者が二三人降りてきただけ、ひょっとすると郵便屋さんも、登山の格好に着替えザックを背負い往復したのかもしれない。
◎登り始めた。今日は晴れと思っていたが家を出る時に小雨が降っていた。ザックに傘を差した。今まで気づかなかったが、空也の滝とは、空也聖人の名かな、踊念仏の人だ。地面が濡れている、ここは急斜面がないので安心だけれど、雨のあとは滑るからいやだねえ。今日一日、天気が持ってくれるといいが、この気温なら、雪ではなく雨になる、雪なら払えばいいが、雨なら濡れていやだねえ。
◎月輪寺（つきのわ、と読むらしい、げつりん、と言っていたが・・）に近づいてきた。いつ降ってきてもおかしくないような雲行きだが、寒くはない、長そでシャツ 2 枚でちょうどいい、止まるとジャケットを羽織ればいい。天然のでかいスギやヒノキが根こそぎ倒れている。それらをチェーンソーで切り刻んで片付けてある、この太さはプロに仕業だね。黒い糞、小指ぐらいの太さ、誰だこんなところに・・イタチか、その仲間か・・。
◎月輪寺のそばに野生のシカがじっとしていた、モノトーンの肌艶、若いメスかな、逃げない、誰かが餌付けをしたのか、人馴れしている、「パンか　ビスケットか　オレ　もってないぜ」
◎月輪寺を過ぎたあたりから雪が顔を出してきた、とはいえ、いつもの冬に比べると少ない。何度も来ているが、上では 20～30 センチぐらいの雪がいつも積もっていた。今回は上でも 10 センチぐらい、しかも融けかけ水っぽい。屋根のあるところで昼めしを食った。おにぎりと野菜炒め、旨そうなおかずがまわってくる、御馳走様。
◎あと 30 分ぐらいで林道に出るというあたりから、ポツリ降り出した。せっかく傘を持参したのだからと、ビニール傘を広げた。時間は 4 時に近いのか、夕方の感じというよりは間もなく日暮れという感じの暗さだ。
◎登山口に降りてきた。「ウイスキー　飲みませんか」「いただきます」堀井さん持参のポケット瓶、生でキュッといただいた、うまい。
◎4：50 の嵐山駅行きバスがあわやのところで出てしまった。5：37 までベンチで待った。さすがに真っ暗。

003　辣腕　110119

正月も一週間以上過ぎ、街はもとの活気が戻ってきた。人が早足で歩き、車が走り、店にはモノが売られている。正月という十日間ぐらいの休暇が終わりもとに戻ってきた。

今朝は寒くて眠れなかった。寒い冬がやってきて、ひょっとして雨戸を閉めたら、寒さがましなのではと思案の末、この一週間ぐらい日暮れになるとガラガラ雨戸を閉めている。南側の二つの開口部の雨戸だけだけれど、あとは邪魔くさいのでそのままにしているが、二か所を閉めて寝てみると、不思議と暖かい。雨戸一枚の断熱効果はあるのだと今さらながらに感動していたが、昨夜はさらに冷え込んだのか朝方寒くて目を覚ました。布団をたたみながら温度を見ると、６度ぐらい、昨日と２度ほど違うだけだけれど、たった２度が身体にこたえるとは我ながら敏感なものだと感心した。北の国で建て付けの悪い小屋の中で薄っぺらな布団にくるまって寝ることを思えば、これでも天国である。

この二三日、ＴＶで気になる画像をみた。ひとつは日産自動車のカルロス・ゴーン。カルロス・ゴーンは潰れかけた自動車会社を、2 兆円の借金まみれを復活させ、またもとの優良企業に戻した人物だ。オレもかつて、ブルーバードのＳＳＳという、スポーティな車を買って乗っていたことがある。昔は多少収入があり新車を買うことができたと昔を振り返る。

ひとつはオーストラリア南部のタスマニア島に移住してくる中国人、類が友を呼びますます移住者が増加しているそうだ。タスマニア島の住民たち、ほとんどがＥＵからの人種、白人だけれど、自然豊かなタスマニアであって欲しいと願う人たちと、タスマニアがもっと発展し、人口が増え経済的にも豊かになって欲しいと願う人がいる。こんな話は日本でも普通に聞かれる話だけれど、ここまでは単なる移住者の話で終わる。「中国が、国の政策として　ここを　中国の管轄地　植民地　に近い状態にしようとしているのではないか」という懸念があるとの報道だった。移住してきた中国人のリーダーが、中国本土の指令を受け、タスマニアに資本投下して街を発展させ、街を一つの自治区を牛耳ろうとしている、と警戒する人たちの話だ。

カルロス・ゴーンは会社を建て直した剛腕社長まではよかったが、どうも傍目に見ても強欲心を出し過ぎたのではないか、何十億円の会社の裏金を懐にしまったのではないかとおぼろげに見えてくる。無罪だと叫ぶ傍らで、私的な大金が転げまわっているさまはどう見ても怪しい。中国共産党の話も、世界のいくつかの国々の内部に浸透して金をちらつかせ、気が着いたら、「我が国の主権まで侵されそうになっている」という話がぼちぼち出ているのではと想像している。ともに自分の仕事を自分の実力で淡々とこなしているうちはいいのだけれど、妙な欲が出て、金が欲しい、あそこの国土が欲しい、掌握したいと、度が過ぎ、世間の目がかまびすしい。

「強烈な個性の　優秀な　辣腕独裁者」「今の時代　過去の帝国主義的　植民地主義的　こんなのは　はやらないぞ　国の在り方　考え方　違うのでは」今までぼんやり戦争のない日本に住み、民主主義だ、人権だ、と叫んでいたが、外国の右や左の外側から、過去の亡霊のような考え方、在り方がどんどん出てくるのには驚きを隠せない。世界がこれからどうなっていくのか、政治の在り方が全く分からないオレには判断もつかないし、報道だけの情報じゃさらに世間を狭くする。トランプの良さはなんなのか、中東の戦いはいつまで続くのか、中国が、インドがどこまで大きくなるのか、時間がたたないとわからない。

オレが言いたいことは、元来絵描きやアーティストというような人種は、自身の生き方、考え方は、自身に対して強欲で辣腕で、その生涯を一本気にまっすぐ突き進むのが本来の姿なのであって、パンを稼ぐために売れる仕事をする、仕方がないからレッスンプロでもするか、こういう姿勢を揶揄する。地位と名誉と金銭にまみれ、人々の評判を集め美味いものを食い、暖かい住まいに暮らすのは下劣で恥ずべきことながら、「地位と名誉と金銭にまみれた方々こそ　絶大なる大芸術家」と絶賛され拍手喝采に酔いしれるバカの顔が見える。「生涯売れなかった」とポツリ呟きながら、毎日描いて在庫を増やしている。自戒を込めて。

004　蝉丸　160119
◎蝉丸の話がなぜここに出てくる、オレ自身まったく異次元の蝉丸の話に引き込まれた。琵琶という楽器の名手その名曲がおとに聞こえ、その時代の創作名手たちによって、蝉丸という音楽・文学・舞台とにぎにぎしく創作されていったのか、その音楽・文学・舞台に接してみたいとあらためて思った。
◎谷川健一：先日来読んでいる＜民衆史の遺産＞という本の責任者、内容は、なかなか難しいがなんとか興味をもって好きなところだけを拾い読みしている。今日は＜賤民＞の項の中から拾い読み。
◎魏志倭人伝：始め死するや停葬十余日、時に当たりて肉を食わず、喪主哭泣し、他人就いて歌舞飲酒す。己に葬れば、挙家水中に詣（いた）りて澡浴し、以て練沐の如くす。
◎倭国では家族の誰かが死ぬと、親戚友人は死者の蘇生を願って死者の傍らで、まるで生きている時のように歌ったり踊ったり、酒を飲んだりするが、死者を埋葬した後は、一家をあげて水辺に行って、喪服のまま水浴する。
◎死者を埋葬したあと水浴するというのは、死者と接触して生じたケガレを洗いキヨメル行為であるとすれば、3 世紀後半の倭国には、ケガレの観念が既に存在していたことが確かである。
◎平家物語で、四宮河原になりぬれば、ここはむかし、延喜帝第四の皇子蝉丸の関の嵐に心をすまし、琵琶をひき給いしに・・。昔、蝉丸といいし世捨て人、山科や音羽里に居をしめ、この関のあたりに藁屋の床を結びて、常に琵琶をひきつつ、和歌を詠じて思いをのぶ・・。
◎蝉丸：この名前は聞いたことがある、吾輩が幼少のみぎり、坊主めくりなるカードゲームをしていた折に出てきたカードなり。頭巾をかぶった老人が琵琶を奏でている図柄だった。上品に言えば、藤原定家が選んだ小倉百人一首の中に歌が納められたカードが我が家にはあった、我が家はそういうものがある上品な家庭だったのだ。坊主めくりを検索すると、蝉丸のカードが出ると全員が緊張する、というのは、この絵札が出た時の特別ルール、全員が持ち札を全て捨てなくてはいけないというものだったそうだ。前事はさておき、天皇の子であったとか、その身内であったとかの話は推測の域をでない。今昔物語では源博雅が逢坂の関に蝉丸を訪ね三年がかりで琵琶の秘曲を伝授されたという話が載っているらしい。
◎これやこの　行くも帰るも　わかれては　知るも知らぬも　あふ坂の関
昔、逢坂の関は山城国と近江国の国境の関所であり、東海道と中山道の街道があった、交通上重要な関であった。ここで人の出会い別れが幾多もあった。
◎能＜蝉丸＞逢坂山に捨てられた盲目の皇子と、放浪の旅に出る狂乱の逆髪の姉、二人は不幸を嘆きあう。
◎大江匡房＜江談抄＞琵琶の名手である「会坂の目暗（めくら）」とあるだけで、蝉丸の字はない。
◎柳田国男は盲目の琵琶法師が山城・近江の境に“かまど払い”（わからない）などして“地神”を鎮めるのを生業としていた。琵琶に合わせ「地神経」をよみ、伝奇を語るのが地神盲僧の役目であった。
◎平家物語では、蝉丸は延喜帝の第四皇子ということになっており、源博雅という人が四宮河原に蝉丸を訪ね秘曲を聞き習ったとある。
◎関清水大明神の縁起：蝉丸は延喜の帝の第四皇子であった。盲目であったので、王宮に居ることができず、江州の相坂山に流された。その後、蝉丸の姉宮はこのことを深く心配して蝉丸の住処を見たく思い、逢坂山を指して夜ひそかに行くと、琵琶の音が聞こえてきた。もしかしたら蝉丸ではないかと草庵の戸に立っていると内から人の足音が聞こえ、戸が開いた。姉宮は蝉丸の手を取ってお互いに涙にむせんだ。蝉丸がやつれているの見て姉宮は狂乱し、御髪が逆さまに立ったので、その名を逆髪と称した。姉弟は間もなく亡くなったので、関清水大明神として祀った。そこで明神の氏子は今に至るまで前髪が少し逆様に生えているのは不思議なことである。
◎夙：この漢字、かつて何年か暮らしたことがある西宮の高級住宅地：夙川、かつての宿・夙のひとつかな。賤民・非人と一概に言っても、それぞれ上下があったようだ。先生：蝉丸は天皇や貴族の血をひくものではあるまいとおっしゃる。四宮（しく）は夙のことである。夙は村境にある辺鄙なところで、そこに遊芸人や巫女、遊女などの賤民が屯集し浮浪人（うかれ）や非人の溜まり場であった。河原は雑芸人の興業の場であり、蝉丸なども地神盲僧のたぐいで四宮河原でほそぼそ暮らす琵琶法師に過ぎなかった。

005　遠野物語-Ⅰ　220119
◎柳田国男著＜遠野物語-口語訳＞民俗学の世界ではよほど尊敬されている人、みなさまが柳田国男の名前を敬意をこめて呼んでいる。遠野物語は知ってはいたが、読んだのは最近、オレが子供時代に聞かされた、お化け・妖怪・風習などがたくさん集められている。今日はその中で、女のお化けの話、次回は河童を予定。
◎雪女：冬の満月の夜には雪女が出ると言われています。雪女は大勢の雪童子（わらし）を引き連れ、触るものはみな真っ白い雪の塊にして遊びます。里の子供たちは、冬になると近くの小高い丘に行き、みんなで橇遊びをするのが楽しみです。あまりにおもしろいので時を忘れ、月が出るまで遊んでしまいます。しかし 15 日の夜だけはいけません。「今日はな　雪女が出るんだから　おめだちも　早く帰って来いよ」と強く注意されます。でも雪女に出会った人、雪女を見た人は少ないのです。
◎全国に分布する雪女の像は、雪の精であったり、成仏できない死者の霊であることが多い。遠野の雪女は、歳神様の性格を持っています。
◎歳神様：正月とは、歳神様をお迎えする行事。本居宣長「歳とは　登志のことであり　登志とは穀物のことである」歳神様は、初日の出とともに現れる。歳神様が迷わないように門松を立てる。鏡餅の中に宿り、鏡開きの日に山に帰る。
◎小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が怪談の中で雪女伝説を紹介している、下記。
◎武蔵の国のある村に、茂作という老人と巳之吉という見習いの樵が住んでいた。ある冬、吹雪の中帰れなくなった二人は、近くの小屋で寒さをしのいで寝ていた。夜、顔に吹き付ける雪に巳之吉が目を覚ますと、恐ろしい目をした白装束、長い黒髪の美しい女が、老人に白い息を吹きかけると、茂作は凍って死んでしまった。女は巳之助にも覆いかぶさるが、「お前はまだ若く美しい　助けてやることにした　だが　この夜のことは　だれにも話してはならない　話せば　命がないと思え」女はそう言い残して雪の中に消えていった。それから数年後、巳之吉はお雪と名乗る白くほっそりした美しい女と出会い、恋に落ち結ばれ十人もの子供に恵まれた。お雪は年がたっても老いることがなく美しいままだった。ある夜、巳之吉がお雪に、「お前を見ていると　若いころの不思議な出来事を思い出す」「恐ろしい出来事だったが　あれは夢だったのか　それとも雪女だったのか・・」お雪は突然立ち上がり叫んだ。「お前が見た雪女は　私だ　あのことを話したら　お前を殺すと言った」「だが　子供たちのことを思えば　お前を殺せない　子供たちを　立派に育てておくれ」と言い終えると、お雪の身体はみるみる融けて白い霧になり消えていった。それきりお雪の姿は見られなかった。

◎山女：嘉兵衛が若かったころ、猟をしに山奥へ入ったところ、はるか岩の上に美しい女のいるのが見えた。ただひとり長い黒髪を櫛ですいていまいした。その顔は透き通るほど白く、とても姿のよいひとでした。嘉兵衛はびっくりしましたが、鉄砲をかまえねらいをつけて撃ち放ちました。弾は命中し女はその場に倒れました。嘉兵衛は急いで駆け付けました。とても背の高い長い黒髪の女でした。嘉兵衛はのちの証拠にとその見事な黒髪を少し切り取り、懐に入れすぐに帰ることにしました。ところが山道を下る途中で、眠くて眠くて、藪の陰に立ち寄りしばらくうとうとしてしまったのです。夢うつつとの境へ、背の高い男があらわれ、ずかずか近づいてきました。男は嘉兵衛の懐に手を入れ、さっき女から切り取ったばかりの黒髪を素早く取り返し、急いで立ち去っていきました。「あれはきっと山男に違いない」嘉兵衛老人は今でもそう思っています。
◎吉兵衛が山へ笹刈りに行ったとき、立ち上がろうとしたら笹原が波立ち妙に冷たい風が吹きわたってきました。吉兵衛が奥の方を見ると赤子をおんぶした若い女が、笹原の上を素足でこちらにやってきます。見ればこの上なく艶やかな女で、笹原に届くほど長い黒髪をなびかせています。女は男を気にするふうでもなく、あっという間に通り過ぎていってしまいました。
◎遠野物語に出てくる山女・山男の容姿は、身体が大きく男は赤ら顔、女は色白で長い黒髪とされています。
◎山女・山姫の伝説やらうわさやらが、ネットにいくつか載っている。狂った女性が山をウロウロする話と妖怪お化けの話がある。各地に、山女・山姫に会ったとか、殺されたという話があるようだ。

006　遠野物語-Ⅱ　230119
◎猿ケ石川は河童の多い川です。川端家の主人の話です。川端家は二代続けて河童の子を身籠った家です。生まれた子供は切り刻んで一升樽に入れ土の中に埋めます。その形はまったく醜いものです。川端家の家族そろって畑に出かけた帰り、この女が川べりにうずくまってなにかニコニコ笑っていました。次の日も同じことがあり、そんなことが続いたあと、「その女のところに　何某というものが　毎夜　通ってくる」という噂がたちました。はじめは聟の留守の時だけでしたが、のちには、その女が聟と休んでいる夜にも来るようになりました。「それは何某ではなく　河童に違いない」と評判が高くなりました。親戚も心配して、「みんなで　これを　守ろう」と手を尽くしましたが、効果がありません。最後に聟の母もその娘の横に寝て河童を待つことにしましたが、真夜中のその娘の笑う声がして、「河童が　来ているな」とわかりながらも、聟の母は声も上げられず、身体も動かせなかった。その時のお産はとても難産でした。知恵者が、「馬槽（うまふね）に水を一杯入れ　その中で」というのを試すとやはりそのとおりでした。生まれた子には手に水掻きがありました。じつはこの娘の母親もまた、昔河童の子を産んだことがあった。この家は士族で、村会議員をしたこともあった。
◎姥子渕（おばこぶち）のほとりに新屋という家がありました。ある日子供に頼んで淵へ馬を冷やしにやりました。（農作業のあと、馬を川に入れ、足を冷やし身体を洗うことは、馬とともに暮らしてきた人たちの務めでした）子どもは馬を川に残して遊びに出かけてしまいました。河童がやってきて馬を淵へ引き入れようとしましたが、馬の力に勝てず、馬に引きずられて厩まで来てしまいました。困った河童は厩の馬槽に隠れました。馬が騒ぐので家の人たちが出てみますと、馬槽がひっくり返っていました。不思議に思いそっと開けてみますと、水掻きが出てきました。村人たちが集まってきて、「いたずらものめ　殺してしまえ」「かわいそうじぇ　許してやれ」河童は生きた心地がしませんでしたが、やがて一人の老人が、「こりゃ河童　お前も　命がおしがんべ　おらも馬が　大事だ　これから絶対　いたずらせんと　約束できるか」河童は急いでうなずき、そのあともその約束を守って、別の滝の淵で住んでいるということです。（遠野には、河童の書いた詫び証文が残っているとか）
◎遠野の河童は、なぜか顔の色が赤いのです。佐々木の曾祖母さんが、幼いころ友達と遊んでいると、胡桃の木の間から真っ赤な顔をした男の子がじっとこちらを見ていました。これが河童だということです。

◎日本各地で、愛され怖れられている河童、西日本ではガタロ、九州ではガラッパ・ヤマワロなどと方言が多い。馬を水の中に引き入れたり、女の尻を触ったりいたずらすきな話が多い。
◎熊本：熊本では河童のことを“ガワッパ”という。河童が好きなのは山桃の実。腕をするする伸ばして実を食べる。河童は山ではよく木こりの仕事を手伝ってくれる。大きな木を運ぶ時も楽じゃった。そんな時はあとから小豆飯やら、はったい粉を地面に撒いてやると、すぐになくなった。ある時河童にいたずらをした木こりがおった。ある時その木コリが木を切っていると、斧が足にあたり大怪我をした。「びっくりせんで　よかたい　おれのいたずらじゃ」さてはと思って木こりが足を見ると、怪我もなにもしとらなんだ。囲炉裏のある山小屋に遊びに来る、「よう来た　よう来た」一緒に遊んでやる。風呂も好きだったが、冷めないようにと温めておくと、熱すぎるらしく、「ぎゃー」と飛び出した。河童が入ったあとは、ドロドロ油のようなものが浮いていた。
◎青森：男が水路のわきの田んぼで田打ちをしていた。昼時になって飯にしようと思って田の畔に冷めないように肌着と股引に包んでおいた握り飯を取に行ったら、握り飯だけがなくなっていた。カラスやトビが盗んだ様子もない。仕方がないのですきっ腹ながら仕事を続けた。次の日も、盗られてはたまらんと柳の木の枝にぶら下げて、仕事をしながら見えるようにしていた。昼近いころに水路の堰から五つ六つぐらいの子供の頭がそろりそろりと出てきた。男は見ないようにしていると、その子供はあたりをうかがいながら枝に手を伸ばした。「だれだあ」と叫ぶと手が引っ込み、またそろりそろりと手が伸びた。「ははぁ　こりゃぁ　子供じゃねぇな　河童だな生け捕りにしてやる」男は縄で罠を作った。「そら来た　いまだ」河童は見事に罠にかかった。「ぶち殺してやる」と鋤を振り上げると、「命だけは助けてけろ　恩返しはするから　オエン　オエン」河童は、河童の世界だけに伝わる、腰痛み、肩痛み、腹痛み、を治す方法を教えてくれた。男は村の人たちを治してやって喜ばれた。

007　ぼやき　270119

ひと月に一回とか、ふた月に一回とか、季節の話、安威川に在って自然の風に当たりながらの、ぼやき話を時々ここに出している。今は冬の真っ最中、しかも今日明日から今季最高の寒波がやってくるとか。たしかに今朝は、寒いと思って目が覚めトイレに行きまた寝入った。冬が始まったころ、寒いなと感じ始めたころに、夜中、寒いと目を覚ましたことがあった。晩秋の生暖かい日々のあとに急に寒さがやってきて、慌て冬用服を用意して着込み、それでもまだ寒いと震えていた。オレの身体もまだまだ気候の暑さ寒さに敏感なのか、急にやってきた寒さに身体が慣れず、たいした寒さではないのだけれど、身体中から冷気を感じ、この寒さに耐えられるだろうかと、自身弱気につまらない妄想を抱く。夏が来た、冬が来た、その初めの一週間、「暑い　寒い」と過剰に反応する身体に脳が追い付けない。その時間が過ぎると身体が脳がそれぞれの温度に慣れ、それほど暑くない、たいした寒さじゃない、と平気な顔をしてまわりをほっつき歩き、空を仰ぎ、彼方を見やる。

オレが住んでいるこのあたり、冬とはいえ暖かい日々が続く。年が明け、日照時間が徐々に長くなり、昼頃に安威川に出かけると、風はそれなりに冷たい昼間の日照りを感じ、顔がいささか暑い、日焼けの感覚がもうすでに始まっている、これからやってくる春を感じる。「下品なくらい　黒いね　日焼けがすごいね　百姓焼けだよ」なんて言われるが、一日たった一時間ぐらい、だけど毎日河原に居ると、日照りをまともに顔に受け、じりじり暑さを感じ、日々顔色が黒くなっていくという様子がもう何年も続いている。大阪平野のこのあたりは気候温暖で晴れの日が多い。そのてん日本海側は、雨の日曇りの日が多いようで、「うっとうしい」向こうに人のつぶやきが聞こえるような日が続くらしい。日本海側でなくても、このあたりでも、山の方に 10 分 20 分走っていくとなんだか少し冷気が増し、先ほどまでポカポカ晴れていたのが、空が薄暗くなってくるということがよくある。さほど高くはないけれど標高 500 メーターぐらいの山々が連なり、冬の冷気が空気をクリスタルにするのか、山肌に生える樹々まではっきり見え、その木々の間を冷たい風が吹き抜けている様が手に取るように見えそうだ。それに反して、下流に向かって走っていくと、いつまでもぽかぽか穏やかな陽気、上着の防寒具も脱ぎ、腰に巻き付け走っている。

今、河原に来ている。5 分ほどかすかに雪が舞った、チラリ顔に冷たさを感じた。今季最高の寒波がやってきているとか、上着のフードを頭にかぶって走っている。とはいえさほどは寒くはない、今期はまだ安威川で氷を見ていない。毎年何度かは凍っているがまだ薄っぺらい氷の破片さえ見ていない。

午後の都合で昼めし前に飛び出し河原に来ている。毎日、「今日は　何時に　河原に　行こうか」と計算しながらその日の予定を考え時間を決める、なんだか大事なことをしている仕事人のセリフのようだと苦笑が出るが、河原に行くことが今のオレにとって行きたいであり、行かなければであり、行かなきゃである。話はそれたがこの昼飯前の時間、当然すぐにでも飯を食いたい時間、腹は減っていたが、リンゴをひとかけらほおばって家を出た。だんだん腹が減ってきて、ガス欠状態に近づいてきた。ほんま物のガス欠、これは二十歳代に家の近所で経験したことがある、本当に車がポツリと止まってしまう。車のガス欠はそれこそ前触れもなくポツリとエンジンが停止する。それ以来そういうことはないが、車の運転中、ガソリンが少ないですよ、という警告ランプが点灯し始め、「100 キロは　大丈夫です」というのがオレの持論。高速道路の上でもランプがついたことがあったが、次のガソリンスタンドまでの距離を見て事なきを得ていたことが二三度あった、褒められた話ではないけどね。話はそれたが、山に入ると、「岡村さんは　燃費が　悪い」「休憩の度に　何かを口に　していますねえ」と人によく言われる。オレは山では常に腹が満ち足りていないと歩けないタイプ、腹が減ると動きが鈍くなり山歩きが楽しくなくなるので、山の中で腹が減ることを警戒している。この腹が減ったという状態でしばらくほおっておくと、だんだんガス欠状態に近づき、大袈裟に言えば、冷や汗が出る、動けなくなる、そんな状態になってしまうと、ちょっと何かを口に含んで、ということをしてもなかなか元の元気に戻らない。今日はカメラを持参していたので、その山用バッグに非常食が入っていないか探してみたが、あいにく前回の山で飴なども食ってしまって何もない。梅干しだけが見つかり、スポーツドリンクと一緒に口に入れなんとかごまかし帰った。「え　カメラ」そう、ちょっと接写で草など撮りたいと、最近写しているが、さほどうまく写らない、と反省。

008　きのこ　300119
◎最近キノコの本をよく借りてくる。山に入っても、キノコの写真をよく撮ってくる。キノコのことでこれまで知っていたことと言えば、秋になれば山に出てくるもの、自然に生えているものは絶対に採って食うのは厳禁、たまにおとぎの国からやってきたような面白いやつがある、その程度のことは知っていたが、それ以上のことを知りたいとも観察したいとも思わなかった。なのになぜ今、突然にキノコに興味を持ち、とやかくいうかと言いますと、この始まりは去年の5月に、ある仲間たちと箕面の山を散策した。山の中の樹々の説明板の中に、キノコ・コケなどの説明が書かれた看板があった。“地衣類”“変形体”という単語が出て来た、初めて聞く言葉だった。読んでいくうちに、目からうろこ、「そうだったのか　知らなかった」と脳の皺に染み込むようにその情報が入ってきた。「今まで知らなかったのか　馬鹿者目」と揶揄される前に叫んでおこう。「オレは　花の名前も　木の名前も　コケの名前も　知らないんだ」

◎ “地衣類”まず目からうろこの話。今までなんだろうこの模様はと思っていた。山をほっつき歩きながら、山の樹々に、山の岩肌に、白に、黒に、緑に、黄に、と模様がある、「あの模様はなんだろう　不思議な模様だ」ぐらいに思っていた。あれは天然の模様なのか、自然にそうなるのか、ブナの木の幹についているあの模様はブナそのものの模様だと思っていたが、これらの模様は地衣類という生物が岩や木の肌に付いているということが書いてあった。「えええ　あれは模様じゃなくて　生物　二つの生物がひっついた　共生生物だ」という。地衣類は菌類と藻類の共生生物で、一見コケに似ているがまったく別のものだという。
◎“変形菌”の話。この名前では知らなかったが、和歌山の巨匠、南方熊楠が研究していた“粘菌”のことだとわかった。学問的には粘菌というより、変形菌というらしいが、オレはこれからも粘菌と呼び続けます。この粘菌、写真集を借りて見たが、「きれい　楽しい　かいらし（可愛いとは照れ臭く言えない）　アート作品ですぞ」と絶賛。粘菌の話はまた後日、これからも興味深く見続けたい。

◎キノコの話で面白い話、驚いたことは、キノコの大きさと、キノコの毒、「ほう　そうだったのか」を紹介。
◎キノコのことは学問の世界では子実体という。“こじったい”と読むと思っていたが“しじったい”が正解のようだ。「子実体」は、「胞子という子供を実らす体」なのだ。キノコの発生量が多い年は、地下の菌糸の成長もよい年なのだ。我々が知っている傘と柄のキノコが単独で生きているのではない。キノコの本体は土の中や木材の中に広がったカビのような菌糸の塊である。菌糸の塊が種々の酵素を出し、周囲の有機物等を徐々に溶かし、栄養として吸収しじわじわ広がる。アメリカの森林に広がっていたナラタケの仲間は、菌糸の広がりが東京ドーム3個分、10トン以上と推定される。
◎キノコの暮らしは、「腐生」と「菌根共生」がある。森の掃除屋として、植物遺体に入り込みボロボロになるまで食い尽くすのが腐生。共生はマツタケのように、菌が木の根に住み、お互いに栄養を渡しあって生きていく。

◎キノコの毒は、今昔物語にも出てくる。毒キノコ：ツキノキヨタケを、旨いヒラタケと偽った殺人話。
◎なぜキノコが毒をもつようになったのか、専門家にもまだよくわからないそうだ。一般に植物は動物からの補色を免れるために植物毒を合成するが、キノコの毒は、ヒトでは胃腸系に1時間、致命的には6時間の反応時間がかかるので、捕食を防ぐ役には立たない。また、食毒不明のキノコが多く、毒の有無や、その成分は、ヒトが食べなければわからない、毒そのものが科学的に解明されていないそうだ。
◎トリフもキノコだそうだ。地面の下でキノコが成熟し胞子を形成する。なんともいえない香りに誘われ動物が穴を掘って食べ、脱糞の折、胞子が地面に落ちる仕組みらしい。それなら日本にもトリフがあるのではと豚君を伴って探したら、その仲間があったらしいが、食用ということでは聞かないが、香りはすごいらしい。
◎なんと、オレの好きな“ギンリョウソウ”の話が出てきた。別名、“幽霊茸”というらしいが、「キノコではありません　居候植物です」と先生。初めて見たときは、「なんだこれ　真っ白け　けたいなやつ」と思った。